

遺橋の橋爪までを六枚町といふ。金澤事跡必録に、五枚町・六枚町は地子銀の員数によつて名付けたとあるが、五枚町には異説がある。→ゴマイマチ 五枚町。

ロクマンブヤマ 六萬部山 白山の市、瀬口舊登路で、越前名蹟考に『一の瀬より三町程行き一本橋有り。假にかけたる橋にて、水出ればおつる。柳谷の橋といふ。危し。是より六萬部山へのぼる。』と記する。今の舊市瀬温泉からの登路では、標高一二五〇米に達する間がそれである。

ロクマンベン 六萬遍 羽咋郡町居通稱堂の前の路傍に、『南無阿彌陀佛(右)永和三・五月十五日佛心(左)日課六萬遍念佛』と刻した石碑がある。加能兩國で年號の見えるもの、最も古い一つである。

ロクメントウ 六面櫃 河北郡談議所火葬場附近に在る。高さ葦石・竿石・蓋石を合はせて一米八。その各面に地藏尊を刻する。六面櫃であらうが、竿石の上部に一面から他面へ貫通した火袋と思はれる方孔があるのは變である。その手法が傍にある享和二年造立の地藏尊に似てゐるから、凡そ同時代のものであらう。

ロクヨウシユウ 六用集 一冊。正徳五年金澤上堤町書車堂三箇屋五郎兵衛板。新曆要覽・金澤寺院名寄・金澤より諸方道程・年中行事・加州湯本之圖・金澤名方薬有所の六つを便覽にしたもので、そのうち新曆要覽は正徳元年から十三年間の月曆である。また改正六用集と題するものは、同じく三箇屋板ではあるが、表裏一枚刷の折本になつて居り、金澤寺院名寄・金府産神祭禮日記・市中町名寄・年中

行事略・諸方道程付、三州温泉箇所並効能を集め、更に増補改正六用集と題したものは、金澤の札所などを加へてある。

ロクロ 鹿路 鳳至郡北郷に屬する部落。に屬する部落。能登名跡志に『六郎木村は道下村より三十町餘あり。大唐竹の御藪あり。』と記する。

ロコウ 侶鶴 ↓ハシロコウ 橋侶鶴。岡野和著。春秋戦國の賢婦人敬妻がその子にして魯の卿大夫たる季康子を誡めた一節を取つて和訳したもの。著者はこれによつてその主前田直時を訓戒せんとしたものである。巻後には論語中の政事に關する語などを拔萃附録してある。

ロジユウソソリヨウ 魯充存亮 金澤曹洞宗瑞雲寺十一代の住持で、詩を能くした。寶曆九年五月五日能登永光寺に於いて寂。

ロチブギヨウ 露路奉行 御露路奉行は初め御歩がそれを勤めたが、延寶五年三十人組頭を置いてからその兼筆することになつた。後に定番御歩小頭の加つて勤めたこともある。

ロツカクドウ 六角堂 金澤六枚町から古道の方へ出る裏小路で、道路屈曲、恰も六角堂をめぐるが如き故に名づける。今六枚町に屬する。

ロツキユウ 鹿裘 ↓キムラロツキユウ 木村鹿裘。  
ロツキヨウ 六橋 キョツ 能美郡金平の内  
ロツキヨウシユウ 鹿橋集 一冊。鳳至郡

甲なる曹洞宗大進寺の僧惠寛和尙の歌集である。  
ロツコウザキ 緑陽崎 珠洲郡の東北端で、狼煙から海に斗出すること二〇〇米許。

# ワ

ワアンセイジュン 和庵清順 曹洞宗の僧。能登の人。一庵如詩の教を受け、その後關東に往つたが、武蔵成田の府主藤原家時、道化を慕うて龍淵寺を建て、和庵を開山として菩提寺に充てた。寛正五年和庵行脚し、その終る所を知らぬ。

ワカ 和歌 (一)和歌と藩侯―加賀藩治の最初期に當つては、未だ文運の興起を見なかつたが、獨和歌に在つてはその片影を認め得た。即ち前田利家が、後陽成天皇の行幸に豊臣秀吉の聚樂第に陪從して和歌を奉獻したるを初とし、同時に利長も亦詠什を微聞に達してゐる。利常は之を好まなかつた如きも、その子光高は中院通村・烏丸光廣に就きて學習し、夫人清泰院も最も堪能といはれた。中世以後藩侯重熙が松梅百首の歌を小松なる天滿宮に奉獻し、重晴が有栖川宮純仁親王に師事し、末期に在つては齊廣夫人が鷹司政熙の女を以て詠歌を好み、その子慶寧も之を能くしたる如き、皆和歌の奨励に與つて力あつたものである。

(二)士人の和歌―されば士人に在つても、利常の時に今枝重直・安見元勝・櫻橋兵太夫があり、綱紀の時には庄田正守・竹田忠種・多賀直

秀・原元貞・菅真靜・山本基麻・大野木克明・萬卷昌興・成田明遠があり、吉徳の時以後には竹田昌忠・原元慶等あり。前田直躬も亦政務の餘暇花月に悠遊した。併し是等御使を以て稱せられる歌人も、天下の趨勢に従うて、古今の格調以外に一步を進めることを得ず、次いで本居宣長の出づるに及んで、その學風遠く北陸に達したが、之が末流を汲むもの、新體を喜び奇巧を衒ふのみで、吟詠に堪へる作歌を見なかつた。

(三)藩外歌人の影響―然るに文政の末、富士谷御杖の來るや、奥村榮實・五十嵐篤好之に學んで萬葉調を詠じ、天保中橋守部の金澤に寓するや、大友象滿・石黒千尋・石黒魚淵等之に就いてその獨特の歌風に從ひ、斯界の活氣將に横溢せんとした。この時恰も田中躬之が烈茂季鷹に學んで歸り、帷を金城に下したから、門人忽ち雲集し、千尋・魚淵も亦之に従ひ、その他山下清臣・狩谷鷹友・三輪照寛・淺野屋佐平・高林景寛・高木有制等多くの俊秀を出した。思ふに藩初以來漢詩を以て自ら高しとするものは多かつたが、歌人を以て目すべきは寥寥の如く、その稍頭角を露したものは、躬之にあらずんば即ち躬之の門下のみである。されば躬之は加賀藩の歌壇に於ける最功勞者といふべきである。

ワカキムカヘ 若木迎 能登では、舊一月十四日の夕にシデ、十五日の朝にタブの薪を用ひ、神供の御食を炊き、山神を祭るを若木迎というた。又十四日に餅二片を齎して山に入り、之を山神に手向けた後、自家の神佛に供へる花木を伐取るを若木迎といふ所もあつた。